
雪うさぎは氷空を駆け巡り

テラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪つさぎは氷空を駆け巡り

【Nコード】

N1482Y

【作者名】

テラ

【あらすじ】

舞台はお決まり魔法や魔法生物の世界「アルヘイラ」。

主人公の「59」は記憶を無くし、雪原のなかひっそりと建てられた建物に監禁されていた、不思議な力を持つ、でもひ弱で優しい少女。彼女は自分の過去を手に入れるため、猛吹雪の中建物を飛び出すが...

プロローグ（前書き）

silver break のイリアス君の影響で機械音痴はパソコンをいじってみました。ガキンチョの駄作ですが小さじ一杯分のヒマと広い心のある人は見てみてください。

プロローグ

冬の寒さが訪れた森に、真っ白で軽いものがふわふわと降りてきた。

「・・・雪だ。」

私と、あの子の大好きな天気。後で、みんなをここに呼んで遊ぼうかな。早く、積もるといいな。雪が積もるまでは私はここで歌でも歌っていようか。私とみんなの大好きだったあの歌を・・・。

悲しいときは空を見てご覧 空に白い華が咲いたのがわかるでしょ？

触ったら溶けてしまったけど消えた訳じゃない まだそこに在るの

「だから悲しまないで 私もたとえ見えなくなっても消えたわけじゃない 私は・・・」

一陣の強い風が、歌声をのせてはるか遠くの地まで走り去って行った。

逃げ出したモルモット

「はあ．．．はあ．．．」

肩で荒く息をしながら石づくりの壁にもたれかかる。もう、だいぶ遠くまで来たけど、まだ追ってきているかもしれない。もっと、遠くまで．．．

「いましたか!？」

「．．．っ!？」

私は嫌と言う程聞きなれたその声の主から自分の姿を隠そうと、必死で細い壁の隙間に体を押し込んだ。

まさか、もうこんなところまで追って来ていたなんて!

(お願い、こないで．．．)

「神」というものを信じた事は無かったけれど、必死に手をあわせて「何か」に祈った。今捕まれば、またあの忌まわしき場所に連れ戻されてしまう。それだけは、避けたかった。

「早く捕まえないと実験が．．．!」

「待て。」

(この声は．．．!)

忘れもしない、いや、忘れられるはずもないこの声。みんなを、次々と消していった男の、感情を感じさせない冷たい声。何もされていないのに、ただ声を聞いただけで身動きが取れなくなってしまつような、そんな声に自然に体がカタカタと震えてくる。

「アレの性質を、直接の管理者のお前が知らない訳がなからう。この空では、吹雪が来る。こっちが死ぬ前に、早くもどるぞ。」

「しかし．．．!」

「二度も言わせる気が。」

「．．．っ!．．．はい。」

ざく、ざく、ざく．．．

雪を踏む、重たい音が遠ざかったのを確認して、私は隙間から這い

出て、雪の上へあたりこんだ。

少女が、ふと目に入った雪の塊を片手に取り、顔の高さまで引き上げると、それは宙に浮き、クルクルとまわってから粉々に砕け散った。それは、自然に起きた現象ではなく、少女がその手で、意図的に行なったことだった。それを行なった少女の顔は笑っているのに、悲しげでもある。少女は、どんな寒さであつても、凍死することはない。そして、氷や水を自由に操れる。それが、彼女の力であり、そして彼女を絶望に陥れるものでもあつた。

「私って．．．何なんだろう．．．。」

ひとり呟いて、少女は少しよるめきながら立ち上がった。その時には、先程まで悲しげに歪んでいた彼女の綺麗なライトブルーの目は、決意に満ちていた。

「もう、いかなくちや。」

その言葉を、弱気になつている自分に向かって強く、強く言い放ち、少女は激しく吹き荒れる吹雪の中に飛び出していった。

私が何者なのか。その答えはまだ見つからない。

私自身の手で、これからそれを見つけていかなければ．．．。

その頃の私はそう、考えていたっけ。

逃げ出したモルモット（後書き）

見ていって下さってくださってありがとうございます、感謝感激雨霰です。

??? (前書き)

まだうまく文の整理出来てないんですけど、気にしないで下さいね。

???

少女が姿を消した後。彼女の逃げ出した建物の一室で、数人の人間による話し合いが行われていた。

「何故“59”を捕まえずにおめおめと戻ってきた!? アレは、唯一の成功品だぞ!」

最高級のワインを美しい絨毯にぶちまけ、近くにあった高価な壺を割つてもなお騒ぎ続ける太った男に、赤い髪の方は一瞬だけ軽蔑の眼差しを向けた。

(これしきの事で取り乱すなど、自らの愚かさを証明している様なものだ。愚か者は愚か者らしく、そこで赤子の様に騒ぎ立てて入れば良い。)

そんなことを思われているとは微塵も考えもせずにもまた怒鳴り散らす男にうんざりしながらも、それでも下の者としての礼儀とやらをやっているように見せてやる。

「申し訳ございません。吹雪に見舞われてしまい、奴の姿が紛れてしまったのです。しかし...」

その声は、ただ聴くだけで震えてしまうような、静かで恐ろしい、しかし美しいもので、少女を何よりも怯えさせたあの声だった。声の主がにたありと笑うと、彼の顔は墮落した天使の顔に見える。

その様子が磨きあげられた鏡に映し出され、赤い髪が炎で揺らめく様には、太った男も思わず黙ってしまう様な恐ろしさがあった。

「アレは、何としても“回収”して参ります。」

言い切るその声は、確信に満ち溢れていたのが、そこに居た人間にはすぐ見てとれた。

「そこまで言い切る自信は、どこから来ているのでしょうかね、アカツキ?」

半分呆れた様に問う女の声に、彼は笑って答えた。

「私は、今までに与えられた任務は全て遂行した。そして、それはこれからも変わらない。その事は、お前が一番わかっているのだから?。」

「そうかも知れないわね。でも、今はそんな事どうでもいいわ。あなたは早くアレを捕獲してきて。」

「言われなくともそうするぞ。」

部屋の外で暴れる風が、こころなしか強くなったよ
うな、そんな気がした。

??? (後書き)

誰ですかね、この男の人。私がつりあえずこの人で連想するのは、
クラスにひとりはずいいる、「私」リッチ&天才」的なひとたち。

ああ愛しの君。プレゼントはカッターナイフ？それとも釘を一本サ
ービスで刺した藁人形？

．．．え？包丁がいいって？ダメですよ、うちのは刃が研げてなく
て林檎の皮でさえむきにくいんですから。

雪原の獣神（前書き）

眠いです

雪原の獣神

一步前も見えないような激しい吹雪の中、“59”は雪原をさまよっていた。

いくら雪や氷に耐性があっても、強い風や膝の高さまである雪をかき分けるには体力が削られる。

それだけではない。彼女は少なくとも一年はずっとまともに歩いたことすら無かった。

それなのにここまで歩くことが出来たのは奇跡としか言いようがない。

しかし、その「奇跡」もそろそろ限界のようだった。

少女の足はよろめき、これ以上歩くことは不可能のように見えた。

(でも・・・立ち止まっちゃ、ダメだ・・・)

捕まりたくない。あんなトコロに戻るくらいなら、飢え死にしたほうがずっと良いに決まっている。

この吹雪が、私を隠しているうちに、はやく・・・

そう心の中で呟いて風に逆らって一步踏み出した時だった。

彼女の足はよろめいた拍子に虚空を踏んで、体のバランスを一気に崩してしまった。

それを見た強い風が嘲りながら弱々しい少女の体を空中に放り出す。

悲鳴もあげずに落ちてゆく少女の体は岩壁に打ち付けられ、勢い良く地面に叩きつけられる。同時に足から嫌な音が響きわたり、少女の体を激痛が走り抜けた。

「・・・っ！」

涙で曇った目で体中を確認すると、病的な白さだったふくらはぎが妙な形に膨れ上がり、赤く腫れあがっていた。他にも、数多くの傷が見られる。

(擦り傷数ヶ所、打ち身三ヶ所。それとこれは・・・骨折かな。)と、重症の怪我人はかなり冷静に自らの状況を確認した。このよ

うなことは“59”にとつては日常茶飯事だったから、慌てふため理由も無かつたのである。彼女の脳裏に、あの場所が描かれる。対象^{モット}“59”やその仲間はみな過去の記憶のない子供たちで、「実験^{モル}」として何処からか集められ、何人かごとに岩屋にまとめられていた。

沢山の「実験」とやらを受けさせられた後には、みな体中傷だらけで、それでも周りの人間はただその怪我の状況をデータにとるだけ。それが元で死者が出てても決して治そうとはしなかった。

みな性格も穏やかで、仲間を大切にしようと思っていた子供たちは、出来るだけ自分たちで怪我をした仲間の治療をした。治療と言つても食事を分け与えたり清潔な場所を譲る位しかできなかったけれど。

それだけのことで大抵の子供は死なずに済んだが、子供たちは怪我が早く治ることを良しとしなかった。傷の治りが早い子供ほど実験に使われることが多くなり、二度と仲間のもとに戻ってくる事がなくなる可能性が高まるという真実に気付かされたからだった。

それでも、皆で生きてここを出よう、絶対に記憶を取り戻そうと誓っていたから皆生きることには必死になっていた。それでも・・・

それでも、“59”の仲間たちは、誰一人逃げ出すことができなかったけれど。

(・・・やだ、私^{この私}ったら。こんな時に考え事なんてして。)
私は、皆の最期^{この最期}の時にした約束・・・絶対に逃げ出して、皆の故郷を、閉ざされた雪原以外の美しい世界を見るって言う約束を守らないといけない。

たとえ私以外がもう戻って来ないものになつてしまつていても、皆との約束、皆の唯一の願いを。

「・・・みんな、との約束、を・・・」

“59”は両手をつき、棒切れのようになった足を引きずりながら雪をかき分けて進み始めた。彼女が片手をひとつ進める度に白い雪を鮮やかな赤が染めて行き、額からは汗が滲み出ていたが、“59”は止まらなかつた。

彼女のこめかみに、大きな石が投げつけられるまでは。

彼女のこめかみに投げつけられたのはこぶし大の黒っぽい石で、頭に当てるだけで動物の意識を奪うことができるような十分な大きさのものだつた。

「・・・痛つ・・・!?!」

朦朧とする頭を押さえながら振り返つた“59”が見たものはいくつかのこぶのように見えるもので、こちらに向かつているようだった。

瞳孔の細い、薄氷色の独特の目を凝らしてみると、異様な姿が目に飛び込んできた。

分厚い革袋を潰したような不細工な容姿に小柄な姿。

「小鬼ゴブリン・・・!?!」

確か、私たちの世話役の一人が飼っていていつも鎖に繋がれていた。たしかとても凶暴で、集団で獲物を襲うと聞いたことがある。そう、例えば人間のような。

「にげない、と・・・!」

彼女が弱々しく呟いて足を引きずつたところでゴブリンには何も困つたことは無かつた。

手負いの獲物が逃げようとしたところで何にもならないことは彼らにもわかつていたから、その行為はかえって彼らを楽しませる結果になつていた。

結果、一分たったかどうかと言う短い時間で“59”は岩壁の方へと追いやられ、逃げ道をなくしてしまった。ゴブリンの方にしてみても、季節外れのこの時期の獲物を逃がすまいと必死だったのでスキはなかったのである。

何回か石を投げつけてゴブリンを牽制していた“59”は、3つめの石を投げようとしたところでその腕を止めた。

もう、いいんじゃないかな。私。私は、もう十分やったのではないかな。

心にふっと流れ込んできたその声は紛れも無く自分のもので、その言葉は意識が朦朧としている

“59”には甘い蜜のように感じた。

(そうだよ、もう十分やったよね。)

そうだよ。だから...

“59”がその声に答えようとした時だった。

突然視界が真っ白になって暖かいモノが“59”を包んで現実に引き戻した。

《小鬼ども。今すぐ私の視界から消え失せろ。逃げない奴は、私が腸を喰いちぎってくれる。》

雪原に力強く響きわたったその声は耳から入るものではなく、直接頭に響くような、そんな声だった。

そしてその声は“59”の目の前に飛び出してきた白いモノ...大きな獣から聞こえてきていた。

気絶しかけていることも手伝っていまいち状況を理解出来ない“59”とは反対に、ゴブリンたちはその不思議な声の主と、その言葉の意味を正確に理解したようだった。

そして、彼らは悔しそうに一斉にひいて行つた。

それを見届けてから“59”の方を振り向いた獣は全身真っ白で、耳が若草色、蒼氷アイスマウンの鋭い瞳と太い牙を持った大きな肉食獣だった。

“59”を無表情に見つめ、何を考えているかは全く読めなかった。

（なんだろう、この獣・・・？）

私を食べるつもりだろうか。もう、どうでもいいけれど。もう、どうでも・・・

そこで、“59”の意

識は途切れた。

ハジメテノデアイ

暖かい。ここはどこだろう。

起き上がって眺めた場所は、ずっと憧れていたような広くて暖かなテントという劇場。

その中にいる俳優は二人の大人の女性と数人の子供たち。私はそれを客席から眺めている。

「~~~~~!」

草を編んだ敷物の上に座っていた、爽やかな空色で、光をうけると薄紫色に変化する不思議な髪をした幼い少女が何かを言おうとして……

「……目が覚めたか。」

「……!?!?」

私……“59”が目を覚ましたのは浅い洞穴の、温かな毛皮の上だった。……ここはどこだろう。

私……小鬼ゴブリンにやられたんじゃ……

「……記憶が混乱していないか?……こつちを見る。」

そのいらついたような低めの声の主を見ると、私と年もさほど変わらないように見える少女だった。亜麻色と水色が混ざりあった不思議な色の髪を乱雑に肩の辺りで切り揃え、水色の無地の服装の彼女は蒼氷色アイズブルーの目でこちらを不機嫌そうに睨んだ。

「聞こえているのだろうか?話すこともできないのか?」

「……そんなこと、ないよ。」

静かに反撃したその声を聞いた少女は無表情で数秒黙りこんだ後、再びこちらを向いた。

「……名前は?どこからきた?なぜ、あんな所にいた?」

た私自身の姿が見えた。

目に映ったモノは目の前の少女より少しだけ薄い色をした肩あたりまでの長さの髪と、丸くて垂れ気味の薄氷ライトブルーの目を持った色白の少女だった。私が彼女を見つめると、彼女もその頼りなさげな目と尖り気味の大きな耳を動かして私を見返した。

私がそんなつまらない事をしていたとき、蒼氷の綺麗な鏡の持ち主が呟いた言葉は意外なものだった。

「や．．．似て．．．」

「．．．え？」

その言葉を上手く聞き取れなかった私が思わず声をあげると、彼女はハツとしたかのように口を閉ざし、何事も無かったかの様に再びこちらを向いた。

「私の名はユキナと言う．．．もう一度聞くが、名はなんと言う？何処からきた？．．．何故、あんな所にいたんだ？」

その質問に、私は思わず口を閉ざしてしまった。説明したくても頭の中で、混乱したメチャクチャな言葉のピースが押し寄せてきて整理できなかつたからだ。名前？．．．自分でも知らない。ただ、「59」と言う番号があるだけ。何処からきた？．．．あそこは、何処なんだろう。何をする為の場所だったかもわからないし、わかりたくもない。何故、あんなところにいた？．．．あんなところは、小鬼に襲われたところだろうか。あの、不思議な獣を見たところだろうか。

「．．．どうした？」

少女の問いに、私は正直に答えた。自分も、事情を説明したいけれど、上手く言い表せない。

それを聞いた少女はひとつ頷くと手を私の手の方へと伸ばしてきた。思わず手を引っ込めてしまいそうになったけれど、それに耐えて勢い良く手を前に出した。二人の手が重なり、互いの体温を感じ取られる。

少女．．．「ユキナ」の手はとても冷たかった。でもきつと彼女

の方でも同じことを考えているだろう。

なんせ私の体はいつも氷の様に冷たいといつても過言ではなかったから。けれど、彼女はそんな風を感じた素振りは一度も見せず、手をしっかりと握った。それを不思議に思っ、て首をかしげているうちに、不思議な事が起こった。

自分の意識に何かが入って来る感じ。心の中に、見えない透明な触手が入ってきて記憶を探ってくるような感じだ。恐怖を感じて抵抗しようとしたけれど、不思議な声によって、それを阻まれた。

《・・・私だ。攻撃はしないから、記憶を見せてくれないか。

・事情を、知りたいんだ。》

頭の中に直接響く、涼しげな声。この声は・・・

(あのときの、白い獣・・・!?)

ハツとして、目の前の少女を見ると、彼女は底の見えない蒼氷の瞳でこちらを見返した。

・・・この瞳!あの時の、あの時の獣と同じものだ!何故すぐに気がつかなかったんだろう?

抵抗を止め、心を開く(開いたような感じにした)。暗い岩屋と仲間たち。恐ろしい赤い髪の男に、数々の実験。そして、自らの正体のわからない不安と恐怖。それらの自分の中の記憶が向こう側へ流れていったのが感じられて、同時に、向こう側からも不思議な記憶が流れてきた。

孤独と絶望を抱えた、白く大きな獣が気絶している少女わたしを眺めている。

驚き、恐怖、希望。あらゆる感情が獣の中を駆け巡る。信じられないことに、私の近くにかがんだ獣は一瞬で姿を少女のモノへと変えて、その手のひらに小さな氷を作り出した。彼女はそれを溶かして水に変えて・・・。その記憶に手を伸ばしかけたとき、互いを繋げていた流れが急に途切れた。

意識が、現実へと戻ってきて冷たい風を頬に感じた。けれど、そ

の風は私の精神を冷やしてはくれなかったようだった。

「・・・名は、“59”、か。」

白い獣と同一の声を持つ少女が静かに呟いた。しかし疑問の一気に噴き出してきた私は、何かを考えている彼女には構わずに疑問をぶつけた。

「今のは、何？あなたは、何者なの！？」

自分の見たものが信じられなかった。ずっと、私は必要もないおかしな力を使えるバケモノだと考えていたのに！この少女は氷を作るだけでなく、姿を変えて、声に出さずに話すことまでやってのけたのだ！

「何者か・・・そうか、今の記憶を見た限り、知らないようだな。私は・・・いや、“私たち”はニンゲンと言う種族じゃあ無い・・・私たちは、“ティキユア”と呼ばれる種族だ。」

「私・・・達。ティキユ・・・ア？」

口の中でその聞き慣れない言葉を転がす。私の頭は今までに無い位に混乱して、ぐしゃぐしゃになっていた。私と同じチカラを？いえ、それ以前に人間ではないと！？じゃあ、私も・・・でも、それは・・・

「・・・ティキユアは特定の姿を持たない。生まれたときに初めから持っているチカラと周囲の環境によって姿を変える事が出来る。・・・チカラってのは私や君の氷を作るものなんかだ。念話もニンゲンはあまりできないらしいな。・・・簡単なものだが。それにニンゲンよりは生命力もある。」

そう言って彼女はほら、と包帯の巻かれた私の既に治りかけた足を指さした。

あまり大したことでもないように「ユキナ」は呟いたけれど、私はその言葉に喜びと困惑を感じることにしかできなかった。まさか、私は人間ではなかったなんて！そんなことって、本当にあるのだろうか。私は氷を作ることはできても、姿を変えるなんて到底できないし、念話なんかも現にできなかった。

「．．．やっぱり、勘違いではないのだろうか？」

「．．．まあ、そんなことを急に言われて納得するほうがおかしいだろう。だが、事実だ。多分、君はニンゲンのもとで生まれたか育ったかしただろうから、体が“自分はニンゲンだ”って思いこんでいるのかもしれない。念話や変化には強い想像力が必要だから。」

「そう言っただけで彼女は髪を無意識にカリカリと掻いた。掻いた拍子に私と同じ尖った大きな耳がひょっこりと顔を出した。」

「呆然としている私には構わずに彼女は髪を指の先に巻きつけながら言った。」

「．．．少なくとも、その骨折が治る明日辺りまではここに居ないといけないだろう。それが治ったら、ここを離れるんだ。近くでティキュアの部落に行けば、匿って．．．」

「．．．た、は？」

「．．．え？」

「あなた、はどうするの？」

その問いに、彼女は無表情な顔で答えた。ここに残ると、それを聞いた時、我ながら我俣だと理性ではわかりながらも感情はそれを抑え切れなかった。

「嫌．．．ひとり、嫌なの。」

それを聞いて困ったような顔をした彼女に私は首を振って見せた。「．．．あなただっただけでわかるはず。一人でいることの、怖さが。」

「目に驚愕の色を見せた彼女に、私はさらに言い募った。」

「．．．さっき、感じたの。あなたの、孤独。私以上に辛くて、悲しそうなあなたの顔が、一瞬だけ見えたの．．．ねえ、お願い。我俣だとはわかってる。．．．一緒に居させて。」

「私は．．．」

「彼女は何か言いかけたようだったが、仕方がない、というようにな草草して見せた。」

「一人でまた歩けと言うのも酷い話だな。それに、可能性は低いがよくわからないニンゲンどもに見つかるかもしれない・・・わかった。一緒に行こう。」

それを聞いてほっとしていた私に彼女は否定を許さない強い口調でただし、と付け加えた。

「テイキュアの部落までは一緒に行つてやるが、そこで終わるだ。・・・私は、部落の中にはいるのは嫌いなんだ。」

「・・・うん、わかった。」

素直に頷くと、彼女は近くにかけてあつた草を編んだらしいチエニツクを私に投げかけた。

「そうと決まれば行くのは早いほうがいい。そのボ口布を脱いで、それを着ろ。まだ歩けないだろうから、私が乗せて行つてやる。文句は無いな?」

「ええ・・・あの、「ユキナ」・・・さん。」

「ユキナ、でいい。・・・何だ?」

「ユキナ」・・・いや、ユキナちゃんの問いに、私は自分ができる限り(と思う)ありつたけの笑顔をもって答えた。

「ユキナ、ちゃん・・・ありがとう。」

それを見たユキナちゃんが面食らつたような表情になつたのを私は(彼女にさつさと着替えると叱られながら)こっそりと見て、小さく笑つた。

(私、バケモノなんかじゃ、なかつたんだ。)

その時はその喜びだけで、胸がいつぱいだった。

今覚えれば、これがユキナちゃんとの出会いだったんだね。今となつては、とつても懐かしいよ。ユキナちゃんと会えて、本当に良かったと思つているしね。

・・・でもね、少しだけ、少しだけ悔しいんだ。

それは
・
・
・

月と星と氷原と

頭上の星と月が、大地を明るく照らす。あらゆるモノが美しく輝くこの凍った大地でもひとときを輝く純白の獣。私はユキナちゃんの変化したそれに乗ってこの氷原を駆け抜けようとしていた。

凍った風が氷の欠片を頬に叩きつけ、私の髪を凍りつかせる。でも、それらは私の気持ちの昂りまでは凍らせる事ができなかった。興奮と喜び。抑えようにも抑えられない気持ちの昂り。．．．こんなことは初めてだった。

（私は、バケモノじゃなかった、ちゃんと仲間がいた！）

一人微笑みながら、白く美しい獣をそつと見つめる。私の我儘ではあるけれどついてきてくれた優しい少女、ユキナちゃん。この少女と出会えた喜びは今までの何よりも大きいものだ。

何処までも広がる広くて美しい氷の大地。それを自由に駆け巡る興奮も、今までに無いものだった。

“．．．あまりはしゃぎすぎるなよ。体力がもたなくなるから。”
呆れたようなその声は、頭の中に直接響いてきたもの。私はもう、これにはすっかり慣れて、言葉で普通に返事を返した。

「大丈夫だよ、そんなに暴れては．．．うわっ!？」

うつかりユキナちゃんから手を離れた私を軽々と拾ったユキナちゃんはまた呆れた声で私を叱った。

“それ見たものか．．．そうか、腹でも減ったか？確かに、飯は一日食って無い．．．うむ。”

「．．．え????？」

今の流れに、食事と言う繋がりがあったっけ．．．?いや、確かにお腹は空いてるけど．．．

“よし、飛ばすぞ。あそこにいるゴブリン辺りなら食べそうだな．．．はい?今なんて．．．”

「ちよつとユキナちゃん．．．うわつうわわつ!？」

“あ、くそ、逃げ足の早い．．．よし、捕まえた。”

「きゃああああああ!?!ユキナちゃん、それゴブリンだよ!？」

“ああ、ゴブリンだが．．．そうか、最初、お前は襲われてたからな。大丈夫だ。こいつら、弱いものは追いかけて回すが私には敵わない。”

あ．．．はい、あの、それはわかったけれど、口から何やら紅いモノが出てる．．．

“そなたは勇敢であつた。そなたの魂が最初の木にたどり着き、新たな体をいただけますように．．．”

ユキナちゃんは何やらお祈りのようなモノを唱えると、ゴブリンの力の抜けた体を、丁寧に地面におろした。

「．．．ユキナちゃん、それ、お祈りだね．．．最初の木つてなに?」

“ああ、知らないか．．．最初の木は、時空の裂け目の向こうにある．．．とされる、世界の始まりの時に最初にできた木だ。全てのモノはここで生まれ、生まれ変わるにはこの木に清めてもらう必要がある．．．らしい。それでなくても、借りにも生物だったモノには敬意を払う必要があるが．．．さて。”

「．．．さて?」

ユキナちゃんは豪快にゴブリンの体を噛んで裂くと、血まみれのそれを私の方に差し出した。

．．．食べるって、ことだよな。

「いや．．．私は、大丈夫．．．」

“そうか?．．．じゃあもうござ。”

なんの躊躇いもなく真つ赤な肉片を丸呑みにする彼女はなかなか．．．正直怖い。純白の毛皮が紅く染まってかなり迫力がある。

「ね、ねえユキナちゃん．．．血、拭かない?」

“ん?ああ．．．ちよつと離れる。”

豪快にお食事を済ませた彼女は後ろ脚で立ちあがると目の前の氷を勢いで叩き割り、それを例の力で溶かして口の周りをすすいだ．．．やっぱり、豪快だなあ。

“生肉は苦手だったか？．．．ニンゲンには苦手な奴多いから感化されてるのか。”

「いついやっそんな訳じゃ．．．」

“そうか？ならいい。”

生肉なんて食べたことがないって言うのが正直なところだけど．．．いつか。

“さ、まだ遠いぞ。ぐずぐずしていられないからな、背中に乗り直せ。寝ていてもいいぞ。ただし、何かで体を結んでおけ。”

「うん、わかった。」

ちよつとムツとするような臭い（理由は．．．わかってる）が追加された、ユキナちゃんの背中に乗り直し、その背中にしっかりと掴まり直す．．．ここが、何だかとても安心できる気がするの、気のせいなのかな。

“さっさと行くぞ．．．掴まれ！！”

「う．．．うん！！」

ひとつの影が、素早く、そして軽快に氷原を駆けて行った。

同時刻。彼女たちのいた洞穴の前に、血のような赤い髪の男．．．
暁と呼ばれていた男、が訪れていた。

「．．．ここにもいない、か。逃げ足の速い奴だ。」

「．．．御意。」

返事をしたのは数人の男たちと、フードを被った何人かの小柄な者たち．．．いずれも、小刻みに震えていたが、暁はそれには関心を持たないまま、つまらなそうにはるか向こうを見やった。

「実験動物が飼い主から逃げるなど、到底不可能だと言うこと

を、思い知らせる必要があるなあ。

「．．．お前たち。」

「はい．．．。」

「身の程知らずのお前たちの姉を探せ．．．決して逃すな。生きた状態で、私が行くまでは捕まえておけ。」

「．．．はい。」

そしてまた．．．無数の影が、氷原を駆け抜けていった。

（アレのチカラは、私の夢の為に必要なモノだ。）

一人その場に残った暁は、小さく笑った。私に逆らう愚かなモノなどに容赦はいらない。

アレがなんと言おうと、何をしようも．．．必ず、アレのチカラは私が使つてやる。

月と星と氷原と（後書き）

なんか不穏な空気が・・・
暁く〜ん？何する気ですか・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1482y/>

雪うさぎは氷空を駆け巡り

2011年12月29日15時47分発行